

# 人間と社会

石 瀬 秀 治

目次	三二一—三三三頁
はじめに	三二一—三三三頁

## 第一節

一 問題の提起	三三三—三三五頁
二 宇宙と人間	三三六—三三九頁
三 生物と人間	三三九—三四四頁

## 第二節

一 人間と文化	三四四—三三九頁
二 人間と社会	三三九—三四四頁
三 人間と歴史	三四四—三五〇頁

## はじめに

この小論の大体の構想は可成り早くに出来ていたものであるが、その後参照すべき未読の文献も累積したままに、又資料の整理も思うにまかせないうちに、更に与えられた紙数も限られているので、ここでは意を尽くさないままに

人間と社会（石瀬）

已むを得ずその大まかな筋道と内容を草稿として点描するに止めたいと思う。

先ずここで読者の便宜のために、この小論の大筋の内容を要約しておくことにしよう。

この小論の主題は先ず人間の生命や生存や実存の意義を問うということにあり、更にそうした人間のつくる文化や社会や歴史における若干の根本問題を分析し、それ等を「人間学」や「人間科学」という問題意識や方法的基礎のもとに一貫して考察しようとするものである。

こうした意図に基づいて、第一に、人間の生存構造を明らかにする予備や前提のために、先ず巨視的な方向においては、地球を含む太陽系や銀河系の構造から島宇宙や宇宙全体の構造へと溯って展望したいと思う。又次に微視的な方向においては、そうした星の進化に伴なう地球上における諸種の物質元素の進化、無機物質から有機物質への進化、生命や人類の誕生という問題へ回帰して究明したいと思う。勿論、これ等の問題領域は私の専門領域である社会学以外に属するものであるが、然しこれらの問題領域のうえにこそ生命や人類の誕生進化の基礎が見出せる筈である限り、又それらを明らかにすることによって宇宙、太陽、地球、生命、ヒトなどについての観方の根本的立場が結論づけられるものである限り、私も驥尾についてこれ等の問題を出来るだけ最近の資料に基づいて考察したいと思う。

第二に、そうした人間は主体的に文化を形成し、社会を構成し、歴史を創造するものとして、つまり優れて文化的社会的歴史的な現実として現象しているのであるが、そうした人間の文化と社会と歴史について、人間の文化による社会化をめぐる諸問題と国民社会という全体社会における階級の問題や国際社会における戦争や平和の問題と将来の歴史において期待さるべき理想的社会像や歴史における人間悪の問題などを指摘し、それ等の宇宙論的な、あるいは生物学的な、更には人間学的な起源や関係や意義などをも探求していきたいと思う。

ところで、この小論がこれ等の諸問題を包括的に取扱うからといっても、それは決して徒らに古典的な「綜合社会

学」の復活や歴史哲学などを意図するものではないが、然し又社会学固有の問題領域のみに跼蹐するものでないことも認めざるを得ない。

この小論は、大体このような問題意識や方法論的基礎に立つて、人間の生命や生存や実存の問題を取扱い、強いて云えば一種の「人間学」や「人間科学」の問題を主として社会学的に考察しようとするものである。言うまでもなく、こうした問題やその方法論の領域においても既に内外に学ぶべき優れた理論や思想がみられるのであるが、この言わば「人間とは何か」という問題を前述のいろいろの領域にわたって一貫して追求していくという問題意識や方法論の構想にこの小論の何程かの特色があるということが許されるであらうか。

それにしても、この小論は前述のように未だ資料の参照整理において不充分であり、又構想の細部について未熟であり、更に紙数も限られているので、このような僅かの前書にたいしてすらも、単に問題や構想の提起のみに終り、従って龍頭蛇尾の謗りを免れないかも知れない。

## 第一節

### 一 問題の提起

戦争は、如何に当事国がそれぞれ正義の旗標のもとに相戦うとしても、人間社会における最も異常悲惨残虐なる極限状況であるために、歴史において忘るべからざる幾多の教訓をわれわれ人類に残す。特に、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、第二次世界大戦など、一連の痛酷な戦争体験は同時代同世代のわれわれ日本人には到底忘れることの出来ない数々の反省と思索などを強いるのである。ここで私ごとを述べるのは甚だ恐縮なことではあるが、私が大学の学業を終えた一九四一年（昭和一六年）には日本のファシズムはますます烈しく荒れ狂い、その十二月に真珠湾奇襲

に始まって太平洋戦争へと突入していった。私は、そうしたファシズムに疑問を懷きながら、又當時の世界体制に殆んど絶望しながらも、大方のよいいよ軍隊へ入隊し、戦死することあるを考えねばならなくなった。然し、応召入隊後暫くにして、運命の振子は私を陸軍病院へ、そして除隊から療養生活へというコースに導き、やがて遂に敗戦を迎えることになった。私が、前書で述べたような、宇宙における人間の生命や生存の意味を問うことを中心とする第一の問題領域と、文化的社会的歴史的なる現実における国民社会における階級と国際社会における戦争や平和と歴史をめぐる諸問題などの第二の問題領域に注目し、それ等を明確に問題として意識し、更にはそれ等を主題として考察するという方向を辿るに至ったのは、主として矢張り上に述べたわが国における一連の戦争につらなる私なりの体験や生活に基づくものに外ならない。

こうした一連の諸問題を考えるに当り、私にとって屢々導きの糸となつたのはカントの「実践理性批判」(一七八八年)の結論の冒頭にある次の著名な言葉であつた。即ち、「それを考えること屢々にして、且つ執拗なればなる程、常に新たにして、また益々強き驚異と崇敬の念とをもつて心を充たすものが二つある。私の上にある星の空と私の内にある道徳律とである」と。

カントは、言うまでもなく、人間理性に関する三批判書によって普ねく知られているが、然し彼は若い頃ニュートン力学の熱心な研究者であつたのであり、その頃の代表作に「天体の一般自然史と理論」(副題、ニュートンの原理にしたがって論述せし全宇宙構造の編成と力学的起源についての試論)(一七五五年)がある。これは次の三部から成るものであるが、今日でもそれぞれ重要な意義をもつものである。それらの内容をここで簡単に要約しておこう。先ず第一部ではニュートンによって確立された地動説の立場にたつて「恒星間における系統的編成」を主題とし、「宇宙構造の新しい体系」を述べ、銀河系を惑星系と類似せる一個の秩序ある体系として解釈する。次に第二部では太陽系

の起源に関する「星雲説」、つまり、太陽系は回転する星雲のようなガス塊から次第に形成されたものであるという理論を述べているのであるが、これは第二次世界大戦後重視されるに至っている所謂乱流渦動説や宇宙塵雲説などに多少違った内容において復活しているものである。更に第三部では「惑星の居住者」という問題を扱い、地球以外の惑星にも居住者がいる可能性を肯定しているものである。

カントのこの論文についてここでこれ以上闡説することは止めて、ここでは唯カントが理性的存在者としての人間が自然科学上の必然的法則によって生成せる宇宙や太陽系のなかの一つの惑星である地球上の一居住者たる地位をしめるものであるという関連を明確に認識し、そうした関連のもとに上なる星輝ける空と内なる人間の理性を常に新たに又強く驚異と崇敬の念をもって眺めざるを得なかったことに注意しておきたいと思う。カントの驥尾について、ここで私も宇宙における人間の地位を同様の観点から考えるものであることを附加しておこう。

尚ここでカントの思想にふれた序に、彼が晩年の論文「永久平和のために」（一七九五年）のなかで、世界社会において永遠に戦争がなくなり、永久に平和の状態が確立されるための諸条件を探索していることを、彼の道徳論における「根本悪」や、自他における人間性を常に目的として取扱ひ、決して単に手段としてののみ取扱わざる人格の結合態としての「目的の王国」の概念と共に、併せて注意しておきたいと思う。これ等の問題はこの小論の後段で改めて取上げることにはしたいと思う。然し先走って云うならば、人間が、広漠たる宇宙全体における一つの島宇宙にすぎない銀河系の、矢張り僅か一つの恒星にすぎない太陽をめぐる一惑星である地球の住民たるを意識し、そこにおいて「永久平和」を確立し、又「根本悪」を自覚しながら「目的の王国」を築くというは、真に真摯崇高偉大な思想というべきであろう。これが私の思想における一つの導きの糸となり、又絶えずそこへ帰っていく思想の一つの故郷たる所以なのである。

## 二 宇宙と人間

われわれ人間がその生命や生存の意味を問う時、先ずその起源や発生に溯って考えてみようとするのは至極当然のことであろう。勿論、一般に発生論は直ちに本質論を尽くすというわけのものではないが、発生論が本質論の前提や基礎とならねばならないことも言うまでもないであろう。

それで、前書で述べたように、次に人間生命の発生の問題を巨視的な方向と微視的な方向にわたって見ていきたいと思う。

先ずそうした巨視的な方向を、宇宙から地球へという順序に従って、而もここでは便宜上出来るだけ専門的な術語や説明を避け、云わば象徴的に点描してみることにしてしよう。

広漠たる無限の空間にひろがる宇宙は、比喩的に云えば、大洋に浮かぶ数々の小島のような、所謂「島宇宙」、あるいは「星雲」から成っている。銀河系やアンドロメダ星雲などはそうした「島宇宙」の一つなのである。そうした島宇宙は、光や電波の届く範囲、即ち、巨大な望遠鏡や電波望遠鏡によって探ることのできる範囲においても、数千億もある、と云われる。

而もこうした宇宙は無限の過去から無限の未来へと連続し、そのなかでは稀薄なガスと微塵からなる「星間物質」がやがて凝集して星となり、この星が自分の引力で収縮して熱をだし、原子核反応により光り始めるのであるが、然し又時を経て収縮爆発崩壊の過程へと世代を交替する。つまり、星は「主系列星」として生まれ、老いて「巨星」や「超巨星」となり、「白色矮星」として生涯を終わり、あるものは「超新星」として爆発飛散する。この場合、質量の大きな星ほど、自分自身の重力で早くつぶれ、それに伴って中心部が熱くなり、原子エネルギーを浪費するので、それ丈早く生涯を終わることになる。そのようにして飛散した星間物質としてのガスや微塵の雲から再び新しい星が

誕生する。

新しく誕生した原始宇宙を満たしているものは中性子であり、中性子は平均十数分で陽子と電子にこわれる。ところで、凡ての元素の原子核は陽子と中性子の組み合わせによって出来る。中性子は水素の原子核（陽子）と殆んど同じ質量であり、ただ陽子のように正の電氣をもっていない素粒子である。従って、原始宇宙においては忽ちに水素が作られ、又ヘリウムが生まれ、このヘリウムが更に次々と中性子を捕え、遂にはウラン元素まで作られていくが、それは僅か二、三〇分の間に行われる可能性もあると云われる。そして、太陽をはじめ殆んど星は水素をヘリウムに変える水素反応のエネルギーによって輝いているのであり、その結果宇宙のなかでは水素は星の進化と共にヘリウムから次第に重い元素へと融合されていく。そうした過程を辿って、現在の宇宙はいろいろの計算や推測によると今から一〇〇億年、あるいは一五〇億年余り以前に誕生したと考えられている。

そして、それ以前の宇宙が一体どんな姿のものであったかは全く知る手がかりはないという。つまり、凡ての星雲や星が収縮し、その凡ての物質が余りにも圧縮されて、原子核さえもこわされて中性子になってしもうからである。唯太陽も含めて、現在われわれの周囲にみられる星々は、何代も世代を繰り返して進化する過程のなかで、水素からウランまでの元素をもつに至ったとも考えられる。そして、地球は太陽から生まれたものであるから、地球の上には誕生した人間をつくっている物質には、曾って一度は空に輝く何所かの星の物質であったものが混っている筈でもあると云われる。

ここで大雑把に点描した宇宙進化論や天体物理学の諸内容は実はここ数十年來の原子核物理学の発展、つまり太陽エネルギーの源が原子核融合反応のエネルギーに基づくことが明らかになったことに負うものであり、ここに広漠たるマクロコスモスの宇宙論が目にも見えない素粒子のミクロコスモスの原子核理論と結びつくことになったわけであ

る。

ところで、宇宙全体は極めて多くの「島宇宙」から成り立っており（地球から宇宙の地平線までの距離は大体一五〇億光年余りといわれる）、われわれの住む太陽系の属している銀河系もそうした「島宇宙」の一つにすぎず、それ自身渦巻状で回転し、その年令は一五〇億年くらいといわれるが、現在では進化の結果直径約一〇万光年、厚さ一万光年という巨大な凸レンズ円盤型をなし、約一、〇〇〇億から二、〇〇〇億にも及ぶ星（太陽）と星間にただようガスと微塵が集って出来ていると云われる。

次にこうした銀河系「島宇宙」における太陽系についてみよう。太陽は銀河系の中心から二万七〇〇〇光年の位置にある一つの平凡な星に過ぎないが、それを中心とした太陽系は地球も含めてそれをめぐる九個の惑星と更に三二個の衛星などから成り、太陽から最も遠い位置にある冥王星までの距離は光速度にして約五時間半あり、一定の方向に公転している。そして、今より約五〇億年（あるいは四十五億年）以前に銀河面に渦巻く星間物質のなかで生まれ、現在の明るさのままで輝き続ける寿命は今後約一〇〇億年と計算される。云わば、余り若くない壮年時代にある「主系列星」である。

最後にこうした太陽系内にある一惑星である地球も約五〇億年前に太陽を作った同じガスと微塵からなる「星間物質」のなかから誕生したものであり、一個の月衛星を伴っている。そして、地球上の物質を作っている元素は、元素進化の過程を経て、現在九二種類に達するのである。

われわれは、宇宙における人間の生命や生存の意義を探るために、先ず巨視的な方向として、宇宙—島宇宙—銀河系—太陽系—地球という順序を辿って、云わばその宇宙論的起源を象徴的に点描してみたのである。広大無辺にして悠久無尽なる宇宙の起源や進化に対しては、今日なお専門家の間にもいろいろの点に関して疑問や異論が少なくなく、



況して専門外の私には理解が及ばなかったり、不充分である点が多いことは云うまでもない。それ故に、これは余りにも簡略粗雑な点描ではあるが、然し私は人間の生命や生存の意義は先ずこうした宇宙論的な起源や基盤から考えていかねばならないと考える。

曾ってニュートンは万有引力を発見し、太陽系を構成する諸天体がどのように回転するかを明らかにしながらも、「単なる力学的原因がそうした規則正しい運動を生みだしたと考えるべきではなく」、そうした体系はただ「智あり力ある存在の意図と支配」によってのみ生じたものに違いないとし、「最初の衝撃」を与えたものとして神を予想した。これに対しカントは太陽系の起源に関しては前述のように星雲説を唱え、神は道德上の「要請」に外ならないと主張したのである。われわれは、現在飛躍的に発達しつつある原子核物理学や素粒子論、更には天体物理学や宇宙進化論の科学的な法則や理論を前にして、曾ってのさまざまな宇宙創造に関する神話や宗教に更に一体何を期待すべきなのであろうか。

### 三 生物と人間

われわれは、宇宙や地球における人間の生命や生存の意義を探るために、次に所謂微視的な方向として、地球上における物質や元素の進化、無機物質から有機物質への進化、生命一般からヒトの誕生にいたるまでの進化の過程を問わねばならない。

ダーウィンのブルドッグと云われ、進化論の代表者の一人であったトーマス・ハックスリーはその著「自然界における人間の地位」(一八六三年)において云う。

「人類にとって問題中の問題——他の凡ての問題の基礎となり、他の凡ての問題よりも興味深い問題は、人間の自然界における地位と万物との関係である。人間はどのようにして発生したか。人間の自然におよぼす力の限界はどこ

にあるか。人間はどのような目標に向って進んでいるのであろうか——これらの問題はこの世に生れたものにとって、は、目新しい限りない興味ある問題として提出されている」と。次にそうした問題を同じ感想に基づいて追求していくことにしよう。

私は先ずここで、前の宇宙進化論に続いて、矢張り物質進化論や生物進化論の立場に立つことを認めておこう。

前に述べたように、ガスと微塵からなる「星間物質」が星となって誕生し、そうした星ではやがて原子核反応により、中性子から水素やヘリウムを経て、わが地球ではやがて炭素、酸素、ネオン、鉄、ニッケルなどのように、次第に重い元素へと融合されてゆき、遂にはウラン元素に及ぶ、いろいろの物質元素が作られてきた。

そして、地球上においては、こうした物質元素の進化のある段階において、そうした物質元素と熱や放射線や特殊な大気との複雑微妙な相互反応の結果、漸く原始生命が誕生することになるのである。便宜のために、オパーリンらの生命の起源に関する図式を次に引用すると、

- (1) 無機物から簡単な有機物の生成
- (2) 簡単な有機物から複雑な有機物の生成、その中には特に蛋白質の生成も含まれる
- (3) 新陳代謝を行う蛋白質、即ち生命の発生

という過程を辿ると考えられている。ここではこれ以上この点についての生化学や有機化学などの領域における説明を紹介することは省くことにし、唯この領域における新しい生物学は、現在核物理学や生化学などとの協力の上に立って、目醒ましい躍進をとげつつあり、生命の諸現象も物質分子のレベルで解明されていること、その結果生命とは生物体を構成する物質が空間的および化学的に密接に関連し合って作る状態であると云われるに至っていることに注意しておこう。そして、生命は少しも神秘的な存在ではなくて、高分子化合物としての有機物の一つである蛋白質が

しめす現象形態に他ならないことを確認しておこう。

地球が誕生したのが今から四十五億年以前であることは前に述べたが、生物生命がこの地球上に発生したのは早くても今から四十億年以前、遅ければ二十億年以前と推定されている。

地球上にそうした生物が発生して以来、ヒト（人類）が出現するまでの生物進化の歴史をみると、古生代（今から約五億年以前から約二億年以前の期間）初期の大生物群の出現、古生代中期の脊椎動物（魚類）の発生と陸棲動植物（シダ植物・昆虫・両棲類）の発生、古生代後期の裸子植物（松・杉・イチョウ）と爬虫類の出現、中生代（今から約二億年以前から約一億年以前の期間）中期の鳥類と哺乳動物の出現、中生代後期の被子植物（顕花植物）の発生、新生代（今から約一億年以前から現代までの期間）第四紀（今から百万年以前から現代までの期間）のヒトの誕生（今から百万年以前）という過程を辿っているのである。ここでもこれ以上生物進化の系統樹やその年代を詳しく辿ることは省き、ただヒトがこうした生命進化の結果誕生した一つの驚くべき被造物であり、一つの驚異に値する生命の形態や現象に他ならないことを確認しておきたいと思う。

ところで、こうした蛋白質と核酸（DNA）を基本的な材料とする生物生命の共通の特徴として、物質交代の機能、増（生）殖の機能、自動調節制御の機能などが挙げられるが、生物生命がこうした機能においても又細胞を始めその多くの分子化学的構造においても非常に多くの共通な一様性がみられるということにも注意しておかねばならないであらう。

さて、人類の先祖は中生代の白亜紀あるいは新生代始新世の食虫類（現代種としては、ツッパイヤ・ハリネズミ・モグラなど）にさかのぼるといわれる。即ち、地上を四本足で歩いていた哺乳動物としての食虫類の一種がある時期に樹上生活を始めたのであるが、それは恐らく現在マダガスカル島に住んでいるキツネザルによく似たものであらう

と推定されている。その後、有尾猿類（狹鼻猿と広鼻猿）との共通の先祖である「パラピテクス」（尾長猿の半分ほどの大きさの有尾猿で、哺乳動物の一番のきめ手になる歯の形態から凡ての有尾猿の共通の先祖とみられる）から、類人猿との共通の先祖である「ドリオピテクス」（チンパンジーを小型にした程度の尾のない猿であって、歯の形が類人猿と人類に共通している）を経て、今から百万年以前に漸く「オーストラロピテクス」とよばれるヒトにまで進化したのであるという。「オーストラロピテクス」とは南の猿という意味であるが、南アフリカの鮮新世末から洪積世はじめといわれる地層から発見され、顔付きはゴリラによく似ていて、大人の大きさは雌のゴリラから人間ぐらいで、その脳の容積は六八〇立方センチ、類人猿のなかで最大の容積をもつゴリラの平均五〇〇立方センチより大きく、現生人類（平均一三〇〇あるいは一五〇〇立方センチ）と較べた場合、生後三カ月の幼児の容積に対応し、前頭葉や頭頂葉も類人猿より発達していて、明らかに石や木や骨の道具を使って、食物をあさっていた証拠もあり、最古のヒトたる「猿人」なのである。「ドリオピテクス」の仲間の一つであるこの「オーストラロピテクス」は当時の厳しい氷河時代を生き抜く間に熱帯の森林地帯から南方の草原地帯へと追いやられ、樹から地面において二足直立歩行を始め、道具を使い、更に道具をつくることを覚えて食物や獲物をあさることになったその日に、彼は人間への道を歩み出したのであると云われる。このようにして、人類は動物学上の分類では、脊椎動物・哺乳類・霊長目・人科・ヒトとして位置づけられている。

この場合、人間と猿類を区別するものとして、単に脳や歯という生物学的な身体の特徴をとりあげる限り、両者は連続していて、その境界が消滅するため、両者を更に区別する徴標として、単に道具を使うことではなしに、更に道具を作ることに注目すべきである。道具を使う猿と同じく道具を使う人間との間には絶対的な区別がない。道具を作るということは、単に与えられたものとしての自然物を偶然にそのまま使用する次元を超え、労働や生産という目的

に役立つように意図的に与えられた自然を更に作りかえる（文化）という自然支配の次元に立つことである。「ピテカントロプス」（ジャバ原人）や「シナントロプス」（北京原人）はそうした道具を作る次元にまで進化したヒトなのである。

「猿人」に続くこの「原人」は今から約五〇万年前に住んでいた人類であり、「オーストラロピテクス」と較べると現生人類に更に一步近づいた状態にあり、脳の容積を較べると、現生人類の平均一三〇〇あるいは一五〇〇立方センチに対し、「ジャバ原人」では九〇〇立方センチ、「北京原人」では一〇〇〇立方センチ、つまり現生人類のほぼ三分の二となる。

「原人」の次の段階の人類が「旧人」、即ちネアンデルタール人類であるが、これはほぼ二〇万年から七万年前に住んでいたもので、脳の容積も非常に大きくなり、現生人類と余り違わなくなってくる。

それから更に進化した段階が「新人」、学名では「ホモ・サピエンス」となり、現生人類は凡てこのホモ・サピエンスの一種であり、黒人や白人や黄人というのは同一種のなかの亜種の変異なのである。

ところで、ヒトを猿と区別する一つの重要な徴標が、道具を使い、更に道具を作ることにあることは前に述べたが、猿人としての「オーストラロピテクス」がアフリカに現われた約百万年以前から「ジャバ原人」や「北京原人」の時代の終わる約二〇万年以前までは、そうした道具や技術、つまり文化の歴史からは前期旧石器時代と呼ばれ、原人はこの時代の後半に現われてくる。次の旧人の時代は中期旧石器時代、更に新人、即ちわれわれと同じ種の「ホモ・サピエンス」の時代のうちで、狩猟採集生活を営んでいた時代が今から七万年からほぼ一万年前で、後期旧石器時代と呼ばれる。そして、この後期旧石器時代以後人類の文化は加速度的に発達進歩し、所謂食物鎖環や食物円錐の頂点に立つ終端動物となり、地球を支配するに至るのであるが、然し人間の生物学的な進化や淘汰はほとんど止まって

しまうことは注目すべきであろう。それは兎も角、人類はその後農耕や牧畜へと進み、道具や文化としては新石器、青銅器、鉄器を作り、又その間土器や更に新しくは機械をも発明しながら進歩してきたことは周知の通りである。

われわれは今迄宇宙進化の過程において誕生した地球において、更にさまざまな物質や元素が進化し、無機物質から有機物質が発生し、生物生命一般からヒトが誕生するにいたるコースの大筋を点描してみたのであるが、それ等は凡てそれぞれ与えられた時空において複雑微妙な相互の反応因果の関係において縁起せるものであり、従つてそれ等については進化という普遍的な科学法則を確信せざるを得ないのである。宇宙に関すると同様に、ここでも私は生物生命やヒトに関する凡ての創造神話や創造宗教の立場と訣別しなければならない。

## 第二節

### 一人間と文化

ここで再びカントの思想に触れることから始めたいと思う。カントは、「純粹理性批判」(一七八一年)の方法論で、人間理性のあらゆる関心が凡て次の三つの間、即ち、(一)、何を私は知り能うか(形而上学や認識論)、(二)、何を私は為す可きか(道德)、(三)、何を私は願ひ得るか(宗教)にまとめられるとし、更に「論理学」(一八〇〇年)では、この三つの間が畢竟「人間とは何であるか」という第四の間に帰着し、それに答えるものは人間学であるとし、従つてこれ等凡ては人間学の課題であると述べている。カントの思想の輪郭については前にも触れたが、それをも含めて、その思想を全体として人間学と解釈することも十分根拠のあることと思う。

われわれも、カントやその他の人達と共に、多少ともその発想や構想において異なるかも知れないが、矢張りそうした人間学や人間科学という問題意識を持って、人間の生存や実存の意味をいろいろの観点から一貫して問うという

方法論的前提に立つものであることは前にも述べたところである。そうした観点から、第一節では、人間の宇宙や地球上の生物界における発生進化の事実を回顧してきたのである。然し私はそれ等の発生論を基礎にして、更にここではその本質論の若干の領域にわたって問い続けたいと思う。

それで、ここでは、先ず人間と文化ということを主題にして幾つかの問題点を取り上げていくことにしよう。

第一節で述べたように、人類は、先ず生物として自然的環境において生きていくために、道具を使い、更に一層良い道具を作り、そのための技術を発明し、文化を創造することによって、猿から訣別し、人類への道を進歩してきたのである。勿論、これも前に述べたように、そうした進歩が可能となるためには、その生物学的な身体的特徴として、二足完全直立歩行、手の歩行からの解放、手による労働、手の発達による道具の使用や製作、手の発達や社会的労働による感覚や運動や知能の統合機能である大脳（特に前頭葉や側頭葉）の進化、社会的労働における分業や協力による言語活動の発達などがみられることは、多くの人類学者やエンゲルス（「サルが人間になるにあたって労働が果たした役割」一八七六年）も述べている通りであろう。そして、人間のそうした経済的労働は、又後で触れる筈であるが、もともと社会的共同生活のなかで、社会的な分業や協力によって営まれたものであり、元来とも社会的労働であったのである。その意味で、人間は「社会的動物」、「道具を使い、道具を作る動物」、「言葉（ロゴス、文化）」をもつ動物」、「考える動物」などと呼ばれるのである。兎に角、人間は、生きる為に、文化を発明し、文化をもつことによって完全な意味で人間となり、又その蓄積遺産としての文化の伝統をもつことにより一層進歩発達を遂げてきたのである。人間以前の動物にも文化のうちの若干の要素はみられるが、然し矢張り人間のみが充分な意味で文化を持ち、そうした文化の創造や文化による形成開発を本質的特徴としているのである。ジンメルの云うように、人間の「生命」は、「より多くの生命」を生きたために、不断に「生命より以上のもの」としての文化を創造し、更新してきて

いるのである。

ここで文化というのは単に言語、道具、機械、技術に限らず、更に知識、慣習、道德、法律、宗教、芸術などの項目や領域にわたる一切の人間の行為様式を意味するのである。そして、夫々の社会においては、これ等の文化項目は一つの複合された構造連関をなし、所謂文化体系を形成し、更に後でも述べるようにそうした「文化体系」が「パトリティ体系」や「社会体系」とさまざまな仕方での統合された社会の構造連関全体を構成しているのである。又それぞれの社会のこうした構造連関全体における「文化体系」や制度と諸文化項目や文化複合の特徴や在り方がいろいろの文化類型として類型づけられることにもなる。

ところで、植物や動物の生命体は、単なる物質的存在とは異なり、一般にそれぞれの程度において単なる因果的必然性の上に尽きないところの自発的能動性、つまり自由をもつと考えられる。即ち、これらの生命個体は外なる環境に対し受動的必然的に順応するのではあるが、それを通して外なる環境から栄養などを内に摂取同化形成する機能や更には増殖、感覚、欲求、運動、神経系などの機能には既に能動的自発性がみられる。その限り生命個体は環境に対して受動的必然的被限定的でありながら、同時に環境に対して能動的自発的限定的なのである。生命は総じてこうした環境的限定と個体的限定との自己同一的相互媒介的場の現象なのである。その限り生命のあるところ既にさまざまな程度において自由があると考えられる。

然しそれにしてもこうした動植物の生命体は如何にそうした自発的能動性をもつとは云え、尚それは殆んど必然的に外的や内的の環境から直接無媒介に限定制約されたものであると云わねばならない。特に動物の行動のうちには極めて巧妙なる自発的創造活動を営むようにみえるものもあるが、然しその究極の規定原理は定形的な種的一般者なのである。アリストテレスが動物は種の奴隷であるという所以である。その意味で動植物的生命の存在根拠は種の環境



的一般者のうちにあり、種的一般者と個体とは直接無媒介に或は即自的に連続融合し、個体は全く種的一般者のうちに埋没吸収されている。従つてそこには未だ種に対する充分なる意味における個体やその自由が対自的にあらわになつていないのである。

このように動物生命の規定原理が種的環境的一般者や種の一般的本能にあるのに対し、人間の行為にはこれを超えて更に理性と文化が加わり、個人は対自的に環境や種的社会に對立し、充実した意味において個人となるのである。

つまり、二足完全直立歩行に基づく手の労働や次第に發展していく社会的労働は神経系の発達や大脳化を伴つて道具や技術の発達と意識活動や言語活動の発達を引き起す。言語や更には文字の發明により、人間の思考活動が発達し、思考活動や道具技術の発達により社会的生産力は發展する。社会的共同生活や社会的分業は社会的な感情や情緒の発達をも促進する。このようにして人間は生命の自覺的存在となり、文化の形成的創造的存在となつてくる。人間のみが地球上における唯一の理性的文化創造者となり、唯一の生命や宇宙の自覺的生存者となるのである。

ところで、人間の言語による思考機能の本来の意味はその推論性にある。推論は典型的には三段論法の形式をとる。それは過去の経験に基づく普遍的知識としての大前提と現在の状況に関する判断としての小前提という既知の二つの判断から未知の未来を結論として予測するという意味を持ち、大脳の発達に基づく自由な人間の理性的行為にのみ認められる特有の生活機能である。それは、行為の時間様態としては、記憶せる過去を媒介にして未来を予測期待計画しながら現在の行為を決定するのであり、現在の行為は過去を背負いながら未来を孕むものとなる。

こうした人間の思考機能に文字の發明が結びつくことにより、人間の文化は言語や文字による同世代間と異世代間にわたる伝達継承を可能ならしめ、同世代間に益々広く普及するのみならず、異世代間の累積遺産によつて次第に豊富となつていく。いよいよ人間の社会と文化は不可分の媒介關係を増大していく。人間の欲求や行為はそれだけ一層

文化による形成統制開発を促進されることになる。況して人間の生まれながらの先天的遺伝的本質は、その知性においても又道徳性などにおいても、何ら進化進歩しないものであるから、人間性の進歩発展にとっては生後における文化や社会による形成開発が極めて重要な意味をもつことになるのである。

人間は元より他の動物生命と同様に個体の生命維持と種の保存などという種の本能や衝動をもち、又その個体発生もいろいろの点において系統発生を繰返しているのであろう。然し人間はそうした先天的無定形的な種の本能や衝動あるいは両親の体質や氣質を必然的運命的に遺伝しながら、而もそれにも増して、知能や文化の発展進歩に基づいて、益々生後後天的に社会の文化を学習習得し、更にはそうした文化を形成創造することによって始めて真実の意味での人間個人となるものであることは「狼に育てられた人間の子」などの事例によっても明白であらう。

人間における先天的無定形的な本能や衝動あるいは体質や氣質の遺伝と後天的な文化による「社会化」との複合関係、あるいは後者による前者の社会化的形成変容統制の関係などを含む個人の欲求の体系としての「パーソナリティ体系」の内部構造は複雑微妙であり、又これと前述の「文化体系」と更には諸集団や全体社会の体系としての「社会体系」との間の関係を分析することは極めて詳細複雑とならざるを得ないことは云う迄もない。これについては唯ここで、極めて抽象的に、諸体系内や諸体系間にわたって、合理的なる調和統合集均衡度の高い、従って不合理な対立矛盾葛藤度が少なく、人間性や文化や社会の発展進歩における不合理な不満停滞抑圧疎外度の少ないような構造連関が望ましいこと、更にそれ等の問題については大理論は中小理論に媒介され、小中理論も大理論に媒介されねばならないことだけを指摘するに止めておこう。

ところで、社会における個人の文化による形成変容開発などは先ず一般にはそれぞれの両親や家族集団によって始められるが、その社会的意味は重要である。社会心理学が説くように、個人の性格やパーソナリティはその体質や氣質

において可成り遺伝の影響をうけるが、然し同時に先ず「第一次集団」としての家族によって、而も五才前後に至るまでのうちにその基礎を型どられるのである。更に家族集団における両親などによる社会化の關係は個々人にとっては可成り偶然的運命的性格を持ち、特に身分社会や階級社会における家族集団による社会化は宿命的に不公平な差別の下に行われる。従って個人は宿命として生み出された家族集団において運命として一定の性格やパーソナリティに型どられる可能性と現実性が大いのである。不健全な家族や不良な環境において不適応な性格やパーソナリティに型どられ、さまざまの不運や悲運に方向づけられた人々は全く遺瀾のないものである。その出生について何らの自由や責任なしに生まれたる子に対し、これを生む親や社会はその出生と養育について最大限の責任と義務を感ずべきであらう。わが国などでは国全土にわたって自由や文化の恵沢を公正に確保するという「文化国家」や更には「社会保障」や「児童福祉」への道は漸く緒についたばかりである。文化は人間がより良く幸福に生きるためのものであり、人間がそうした文化や文明を持つことを誇り、「文化国家」を自負するのであれば、将来に向って差別抑圧のない公正な文化の恵沢を不断に促進していくことが自由な豊かな社会の不可欠的徴標たることをここで強調しておかねばならない。それと同時に、いま一つ文化に関して、現在の人間社会においては、人間がその生命の維持発展のために作り出した文化文明が逆に人間の生命をさまざまな形において否定疎外破壊する可能性や悲劇を生み出しつつあるという逆説的アイロニーにも注意しておかねばならないと思う。人間と文化をめぐる問題についてはこれだけに止めておかざるを得ない。

## 二 人間と社会

人間は社会的動物であると云われる。先ず人間は両性哺乳動物の系統に属し、そうした生物的動物的心然性に基ついて、夫婦關係と親子關係を中心にした家族集団を形成せざるを得ない。而も人間の子供は出生後の幼児期間が極め

て長く、長期にわたる扶養養育教育が必要となり、親子関係を中心にした家族集団が必須不可欠となる。高級猿類においても親子関係を中心とした家族に似た「類家族」集団がみられ、社会の萌芽は既にそこに現われているのである。而も人間の身体は他の動物に較べて頑丈強力でもない故に、自然の脅威や猛獣の住む環境に適応して、生命を維持し、種を保存する為には、矢張り社会的共同生活が有効な生活様式たらざるを得ない。

それと同時に、人間は、採集狩猟漁撈から農耕、牧畜の生産生活へと進んでくるのであるが、何れにしてもそうした食物の獲得や衣料住居の製作などは社会的協同的な労働によって営まれてきたのである。こうした社会的労働によって言語の発達が促進される関係については前に述べた通りであるが、そうした言語の発達により又一層人間の社会生活が拡大されていく関係にもここで注意しておこう。兎に角人間の生活は以上のような理由によって社会的協同生活たらざるを得なかったのである。

ところで、採集狩猟漁撈に基づく原始の未開社会では、大体数家族から成る「バンド」と呼ばれる移動的な地域集団を単位とし、複数のそうした「バンド」から「部族」が構成され、この「部族」が「全体社会」を作るのである。人類の一〇〇万年の歴史のうち大まかに云って近々略々一万年前にいたる迄は、そうした採集狩猟漁撈の移動生活を営んでいたものであり、その後漸く次第に農耕牧畜の定住生活に移るのである。更にその後の人類社会は益々拡大と分化と組織化の方向を辿り、基礎的全体社会のうちに機能的部分集団を派生し、次第に加速的に文化文明が繁栄してくることは多くの社会学者の説くところである。そして、今日では人類の全体社会の範囲は民族あるいは国民社会にまで拡大し、更に国際社会や人類社会にまで連合するに至っていることも周知の通りである。ここでもこうした人間社会の歴史についてこれ以上触れることは止めて、次に直ちに現在の国民社会における階級の問題について触れておきたいと思う。

「『アダムが耕し、イヴが紡いだ時、何所に貴族があつたか』という標語は十三世紀頃のヨーロッパにおいて独裁專制の君主達の圧政に対して起こした農民達の反対運動のなから生まれたものである。又既にギリシアの時代にプラトンは、貧富の著しい不平等があるところでは、国家は一個の国家ではなく、二個の国家、即ち貧者の国家と富者の国家となり、これ等は同じ所に住みつつも、常に互に憎み合い、謀略を弄し、反抗を企てるということになると云う。これ等に類する言葉は他に幾らも挙げることが出来るよう。

人類の歴史百万年のうち九十九万年間は大体無階級の所謂原始共產制社会であつた。前にも述べたように、その後の定住的な農耕牧畜、つまり食料の生産が始まつた今から八五〇〇年程前から、そうした社会的生産力の向上と共に余剰生産物が規則的に蓄積されるに伴つて、次第に全体社会のなかに、そうした経済力のみならず、更に政治權力、軍事力、宗教的特權、学芸上の才能、その他特殊な個人的能力などを契機にして、生産手段に対する私的所有が成立し、上層支配階級と下層被支配階級への階級分化が発生してくるのである。つまり、無階級の原始共產制社会に続いて、古代奴隸制社会—中世封建制社会—近代資本制社会、更には無階級を理想とする現代の社会主義や共產主義の社会が発展してくることは周知の通りである。階級の発生や古代と中世の身分社会をめぐつて幾つもの重要な問題があるが、ここではそれ等を凡て割愛し、次に近代資本主義社会についてのみ一言しておく。

近代社会は大体十六世紀に始まり、宗教改革や市民革命や産業革命を経て、十九世紀に至つて完成したものである。そして、それは政治的には民主主義を標榜し、経済的には自由主義的資本主義のもとに発展してきた。ところが、この民主主義と資本主義とは、資本主義の上昇期においては、その生産力の躍進によつて一応即時的に調和両立していたのであるが、然し十九世紀の中頃から二十世紀へ進むに従つて、次第に経済的な不平等や不自由を増大せしめ、貧困、失業、恐慌、独占、帝国主義戦争などの矛盾欠陥をあらわにし、その結果自由主義的資本主義における経済的な

不平等や不自由は政治的民主主義における自由と平等の理念をも疎外し、両者は遂に對目的に分裂するに至り、民主主義はその實質的完成を阻害されて、單なる形式に陥るという危機狀況に遭遇することとなるのである。無産者の生存権が、或いは並ての人間の生存権が有産者のそれと等しく實質的にも公正に保障せられないところにおいては民主主義も單なる空名に終ることは先に引用したプラトンも既に指摘するところである。ここで蛇足になるかも知れないが、言うまでもなく凡ての人間が等しく差別なしに宇宙の子であり、太陽の子であり、地球の住民であり、人類の子孫たることを想起しておきたい。そして又各人の階級所屬の運命的偶然性は前述せる各人の家族所屬の運命的偶然性を一層強化するものに他ならないことにも注意しておきたいと思う。人間生命本来の姿においては、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず……万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく」生存する權利をもつのである。兎に角、そうした関連において、資本主義國家における階級の問題は一般には国力や各資本力に適切に相應した民主主義的實質的完成としての抑圧差別のない自由平等の理想社會、あるいは完全なる意味における「福祉國家」や「文化國家」という方向において解決せざるを得ないことは今日では至極當然の常識というべきであろう。然し社會主義國家も、それとは違ったコースや方法を取りながらも、究極的には矢張りそうした理想社會を期待しつつあると考えてよいのである。そしてこのことは社會主義を動かしている原動力が單に經濟的なものにあるのではなく、実は深く倫理道德に淵源していることを示すものであると云わねばならないのである。

上述のことを社會と個人の關係に移して図式的に云えば、社會が優越して個人がその内に即目的に埋没吸收されていたような時代から、個人が次第に獨立自覺して社會に對目的に對立優先していく個人化の時代を経て、更に自覺獨立せる個人が社會の成員として即且對目的に再び成員の總體としての社會に主体的に参加し、内面的にも結合されるに至る時代に向つて發展していくとも云えるであらう。

次に国際社会や人類社会の問題に移ろう。人類は今に至るまで長い間闘争や戦争に明暮れてきたようである。今日迄の人類の歴史は実に階級間の闘争や国家間の戦争に満ちているという側面をもつことは否定すべくもない。

サムナーはよれば、われわれ人類の祖先における意識や行動は、「内部的集団」(「我々の集団」)と「外部的集団」(「他人の集団」)という二種類の集団の対立によって規定されている、という。「内部的集団」は自分自身がその成員であり、その内部には愛情、結束、秩序、平和が支配する集団であるが、これはそれ以外の「外部的集団」に対する輕蔑、憎惡、敵意、戦争と一体をなして対立する。M・ウェーバーの言葉で云えば、「内部的集団」には「内部道德」が、「外部的集団」に対しては「外部道德」が支配し、道德の二元性、あるいは二元的道德が生まれることになる。

然しこうした二元的道德という生活態度は決して単に我々の祖先の部族時代にのみ特有のものであったのではなく今日尚依然として主権国家との対立闘争せる国際社会の場に根強く残存していると云ってもそれ程云い過ぎにはなるまい。今日の世界は資本主義国家群と社会主義国家群に分裂し、更に各国々が依然としてバランス・オブ・パワーの原則に基づいてそれぞれの利害關係をめぐり敵しい対立闘争を繰返しているのであるが、若し人類が翻って宇宙の悠久壮大なるを思い、顧みてこの地上に将来における一層の發展進歩を真摯に望むのであれば、人類の長年にわたる文字通り血を流しての戦争教訓に恐縮し、現代における世界史や人類史における未曾有の画期的な社会拡大過程と技術革新状況を洞察して、凡て各国各人は相共に先ず人類愛や恒久平和の理念に基づき、「国際連合」への忠誠を完成するため、自今速かに一切の戦争を放棄し、一切の原子兵器を廃棄し、軍縮や核実験停止を協定し、その他必要な凡ゆる現実的施策を真摯有効に考究実現していく責任や義務や使命を負うものと考えねばならぬであろう。兎に角、宇宙や人間生命の意義を冷靜謙虚に熟考する時、戦争のない恒久平和や「平和のうちに生存する權利」などは現在では

差迫った至上の断言命法とならねばなるまい。こうした戦争のない恒久平和に基づく国際社会の実質的民主化は臆て同時に前述せる国民社会における階級対立を止揚する実質的民主化をも促進し、又国民社会のそうした実質的民主化が臆て同時に又国際社会の実質的民主化をも招来するのであって、両者は相互促進的に両全さるべき媒介関係にあると考えられる。わが国の「教育基本法」において、「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉」に貢献することが人類の理想とされている所以であらう。

曾ってホッブスは人間社会の自然状態においては「人は人に対して狼である」とし、「万人の万人に対する闘争状態」を想定したのであるが、勿論これは事柄の一面あるいは半面のみを見たものに過ぎない。それよりもガルシンや魯迅らが「狼は狼を食わぬが、人間は人間を食う」と厳しく非難している所以を現在の国民社会や国際社会について反省していかねばならないと思う。

### 三 人間と歴史

歴史の概念には二様の意味がある。一つは過去に客観的に生起せる出来事やそれを客体として記録敘述したものを意味する。それに対し、今一つのは人間が過去を顧みながら未来の目標や理念に向けて現在の行為を主体的に決断する過程という意味を含む。今仮りに前者を客体的歴史、後者を主体的歴史と呼ぶことにしよう。

第一節では、主として客体的歴史の立場から、宇宙や地球や生物などの進化の歴史を探求したのである。そして、第二節の「人間と文化」と「人間と社会」では、人類が次第に主体的に文化を創造し、社会を構成してくる歴史を考察した。そしてそこに「文化国家」や「福祉国家」の理念と更には戦争のない恒久平和に基づく国民社会と国際社会の実質的民主化という理念を導き出したのである。ここで初めて、これ等の客体的歴史を総合し、これ等の歴史的過程を顧みながら、われわれ人類が将来に向けて主体的にその歴史を生きる場合、あるいはその歴史を作ろうとする場



合、更に如何なる理念が生き甲斐のあるものとして投企さるべきであらうか。それは、端的には、又抽象的には、更にキリスト教風に云えば、国内と国際間における自由と平等と友愛に基づく而もその為に豊かである社会であると云えるでもあらうか。近代民主主義における社会的政治的自由や平等や友愛の理念が実はキリスト教徒における魂の在り方を示すところの宗教的民主主義に淵源することは周知のところであらう。又社会における自由と平等と豊富ということは決して直接無媒介に結合し得るものではないが故に、そうした理想社会への移行に関しては、各国々の社会的歴史的諸条件の特殊性に應じて、さまざまの多様な特殊の形態が採られ得るものであることも云うまでもないであらう。

人間は生存していく為にさまざまな欲求や願望や理想を充足実現していく。そうした欲求は各人の「パーソナリティ体系」や又「文化体系」や「社会体系」のなから、又それ等の促進阻害の相互関係のなから、常に新しく開発育成発展せしめられていく。そうした場合、社会によって開発育成された凡ての正当な欲求が凡ての個人に差別抑圧なしに自由平等に而も豊かに充足されるような国民社会、又そうした理想的国民社会の存立を保障するような戦争のない平和な国際社会が将来に向って逐次期待投企されていかねばなるまいと思う。言う迄もなく、人間のパーソナリティはその先天的遺伝的な本質においては何ら進歩するものではなく、生後社会的環境の如何によって甚だ大なる影響を受けて変容開発されるものであるから、社会や世界が期待される理想像に近づく程、それ又パーソナリティも期待像に近づくこととなり、更にそうしたパーソナリティは一層良い文化や社会を実現するに至るといふ相互因果関係を決して軽視してはなるまい。そして、若しわれわれ人間がそうした程度の理想社会を将来の歴史に向って期待発明実現出来ないものとするならば、人間もその社会や歴史も軽蔑すべきものではないにしても、それ程尊重すべきものでもないということになるのであらうか。

ところで、ここでそうした理想社会実現の爲の組織的方法論について一言しておこう。われわれがそうした理想社会を実現するに当り、今日の巨大な大衆社会的国民社会や更には一層広範なる国際社会に対し、個々人が直接無媒介に働きかけるなどということは殆んど全く不可能にして無効なるは云うまでもない。今日巨大社会における政治運動や社会運動は多くの場合政治団体や労働組合やその他の諸団体などの組織を中心にして行われているが、各人はそうした場合夫々の地域や職場を中心にして自発的主体的に小集団を組織し、こうした小集団組織の縦断的横断的結合を媒介にして飛躍断絶なしに漸次段階的に全国あるいは国際的組織に連絡し、上部組織と下部の小集団組織との間の活潑有効なる双方的情報伝達や民主的運営を計らねばならないと思う。つまり、個々人と巨大組織や巨大社会との直接無媒介な結合関係ではなしに、その間に中間的媒介的な小集団組織を必要だけ縦断的に又横断的に組んでいくという三次元的組織法、あるいは多次元的組織法が肝要なのである。蓋し、巨大な集団や社会において実現さるべき一般的合理的抽象的な目標や課題はそれぞれの自発的主体的な小集団内における直接的面接的熟知的な又パーソナル・トータル・エモーショナルな人間関係や連帯関係における集団的な思考や討議によって具体的個別的に相互的確認や実現に対する情熱や勇氣などを培養増幅され、前者が後者によって基礎づけられることが、その発生過程からみても順当であり、又社会技術上不可缺少と考えられるからである。

最後にここで、われわれが歴史において理想社会を主体的に投企創造するとしても、人間の単なる技術的制作的社会的自由を超えた、そうした歴史的倫理的実存の行為における自由に附纏う悪や罪の問題について反省しておこう。

元来、人間は前述したようなその意識や思考や自由の発達により、他の動物とは異なり、自己自身の意識や自我の自覚を有する存在なのであり、この点にデカルトやカントなどは人間存在の根源的な存在性格を認めたのであるが、然しこの同じ存在性格が、例えばカントが指摘しているように、自我の精神的疾患の最も奥深い源泉にもなり果てる

ものなのである。即ち、それは人間をして自己をすべて自己ならぬものから差別して我（エゴ）と呼び、汝に対して我のみを主張しようとする自愛や独善や自己主義に頹落せしめる傾向をもつからである。而もそうした傾向は既に可成り早く幼児の時代から見られるのである。こうした自己の存在と発展のみを主張しようとする人間のエゴイズムは更に動物としての人間個体の生命維持という自然的動物的なエゴイズムにまで溯源するのもかも知れない。

これを更に別の観点から考えてみよう。つまり、人間は生存の為に、意識や自由を發展させ、文化や社会の發達と共に、様々な欲求や願望を開発してきたのであるが、それ等の欲求や願望は、例えばトマスとズナニエツキによれば、次の四種類に區別される。即ち、（一）安全を求める願望（食欲や身体保護への欲求から始まって生活の安定を求める願望）、（二）感情的反応を求める願望（性欲につながり、他人―異性・近親・隣人・友人・同胞など―を愛し、又他人から愛されたいという願望）、（三）社会的認知を求める願望（他人に認められ、尊敬され、賞讃されたいという願望）、（四）新しい経験を求める願望（好奇心のように、刺激や変化を求める願望―これは生命の探索反射や探索反射に由来すると思われる）である。勿論これ等の願望や欲求は或時は相互に吸引補強し合ったり、又或時は相互に反撥対立し合ったり、一方が強まれば、他方が抑えられるという複雑な關係において充足もされ、又不満に陥ることもなる。これ等のうち特に社会的認知を求める願望は誇示欲や名誉欲や虚栄欲ともなり、更に安全を求める願望と結合したりもして所有欲や権力欲や支配欲ともなつて現われるのである。そしてこれ等の欲求も矢張り遠くは被造物としての人間の生物的動物的自然に淵源するのもかも知れないが、今迄の人類の歴史においてこうした過剰なる自愛や独善や権力欲や支配欲などが数知れない悪と罪を犯してきたのである。

この問題を更に倫理的道德的実存における行為の構造に移して云えば、人間の善を為す道德的自由も所詮は惡を為す自由に繫縛纏綿され、そうした惡への可能性や自由の否定的媒介の上に成り立つ制約された有限なる自由であるこ

とを意味する。カントも、そうした「根本悪」は克服することは出来るも、根絶することは出来ない、とした所以であらう。

そうした有限なる倫理的道德的実存の自由において、悪への傾向に触発され、悪徳や背徳や独善に誘惑される己の魂における暗黒の深淵を凝視する時、次のパウロや親鸞などの言葉は矢張り警策となって響くであらう。即ち、パウロは「わが欲するところの善は之をなさず、反って欲せぬところの悪は之をなす。……然れば善をなさんと欲する我に悪あり、……噫われ悩める人なるかな、……」、と告白する。又親鸞は、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」、「誠に知ぬ。悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚のかずにいることをよろこばず、真証の証に近づくことを快まず、恥づ可し、傷むべし」、と述懐する。高等宗教が等しく懺悔を説く所以であらう。

然し歴史における人間実存の自律的な道德的実践理性の立場は、更にそれが善や義務や忠誠の解決し難き深刻な対立相剋あるいは衝突葛藤さらには矛盾二律背反という事態に遭遇する時、いよいよその非力なる根源的有限性をあらわにせざるを得ないのである。勿論、それにはさまざまな程度や種類があり、又個人の道德的良心の自覚度や鋭敏度によってもその現われ方は異なるであらう。然し総じてそれは深刻にして解決困難な、而も安易な妥協や折衷や判断中止も許さず、即刻解決突破を迫まるという痛酷な状況において起るのであり、被造物としての人間における自律的な道德理性の絶対性の立場はこの非力な根源的有限性や根源的相対性の境地において崩壊することとなる。われわれ人間が、歴史における実践的道德理性の立場を真摯に尊重しながらも、こうした実存の限界状況において、謙虚に又精一杯に、場合によっては命賭けの境地において思い余って信ずるところを行じ、その結果悪や罪をも犯すことがある場合、一体これを更に鞭打ち得る者は誰なのであらうか。とすれば、究極において、人間生命の日々の所業は凡

て無常に移ろいゆく相對界に屬しながらも、尚同時に絶対永遠の意味をもつものとして感得し、又歴史の意義を單なる過去や未來や現在の何れかの方向のみに求めるのではなしに、現在の瞬間の根底において永遠の今や絶対に接するという意味をもつものとして、所謂「仏向上」行において「修証不二」として體驗しうる境地、そこに宗教の門が開かれてくるのもあろう。人間生命における自愛や独善や權力欲、他愛のうちにさえも潜む自愛、剩さえそれらを合理化しようともする増上慢、惡への傾向に否定的に媒介された実践理性の當為的立法、更に遂には二律背反にも陥るその根源的有限性という事態を顧みる時、所詮人間生命は全知全能者と動物生命との中間者たるに他ならないことを知らしめられる。

われわれ人類は凡て被造物として運命的にこの地上に生み出され、それぞれ身体的、家族的、職業的、階級的、人種的、民族的、国家的、國際的に異なつた宿命を背負いながらも、將來の歴史に向つて自由平等の理想社會を共同の責任や使命として投企希求するは当然至極のことであるにはしても、翻つてその実存の脚下を照顧する時、各人はそれぞれの器量に應じてさまざまな社會惡と同時にそうした人間惡の克服に精進することを忘却してはならないのである。その意味で理想社會實現のための社會變革は同時に人間變革に媒介されねばならないと同時に、又勿論人間變革も逆に社會變革によつて一層促進される筈のものである。両者は相互媒介的に發展兩全さるべきものであろう。

もともと人間のカルチャー（文化）は人間が自然を耕作するという語源に始まるのであるが、それはそうした自然を耕作することを通して聽て精神を耕作する段階に發展していくべきものであろう。事実人間の文化は單なる道具、機械、技術の物質文化の領域から次第に慣習、法、道德、科学、哲学、芸術、宗教などの精神文化の領域へと分化進展してきているのである。形而下の自然の耕作や社會の開發、自然や社會にかかわる技術的、制作的、社會的自由と並んで、矢張り人間性の悲慘醜惡非力なる側面についての自省自戒、形而上の魂や精神の耕作開化、精神的倫理

的道德的実存における自由の自覚に基づく人間変革ということが輕視されてはなるまいと思う。真に世界史は「自由の意識における精神の進歩」という面をもつのである。

それや、あれやを思いながら、私は再び人間生命の生物的動物的起源や更に宇宙的根源ということを回想せざるを得ないのである。つまり、われわれ人間実存の内なる崇高な実践的道德理性の暗黒非力なる深淵を覗き見る時、翻つてその根源である上なる星煌めく天の空を憧憬や祈念や敬虔などの入交つた情念をもつて高く仰ぎ見ざるを得ないのである。「吾十有五にして学に志す。……四十にして惑わず。五十にして天命を知る。……七十にして心の欲するところに従えども矩を踰えず」とは、如何に中国封建制度の封鎖的伝統的な社会生活のなから生まれたものとは云え、真に達人の言葉と云わざるを得ないのである。

歴史について少し反省してみたことで、やや唐突ではあるが、次のM・ウェーバーの含蓄ある言葉を思いあわせて、一応この小論を終ることにしよう。

『…この（近代的経済秩序の）大いなる発展の尽きる時には、全く新しい予言者たちがあらわれるのか、それともありし日の思想と理想との力強い復活が起るのか、それとも、その何れでもなくして、一種の病的自己陶醉をもつて粉飾された化石的機械化がおこるのか、それは未だ誰も知らない。もし最後の場合であるなら、こうした文化的発展の「最後の人々」については次の言葉が当てはまるであらう。——「精神のない専門家、心情を失える享樂人、これら無にひとしきもの思いあがりて、人類の曾って到達せることなき段階に遂に到達したりとなす」と。——』